

連載 “Well-being”ことはじめ

第 101 回 そもそも見えているだろうか

臨床心理士・公認心理師・カウンセラ

三村 和子

企業のカウンセリングの場では、コロナ禍以降ハラスメント関連の相談件数が増えています。働く人から寄せられるパワーハラスメントの訴えには、以前にはあまり見られなかった、判断の難しい稜然としないケースが増えているように感じます。ケースの共通点として、1) 被害者と加害者という対立構造、2) 自浄作用を促す話し合いがなされず、職場とは切り離され、いわば密室で取り扱われる、ということがあると思います。場合により、被害者の一方的な主張により、加害者とされた側がむしろ被害者となってしまう事態さえ生じる懸念があります。立場や価値観の違い、孤立感、感情コントロールの難しさ、パーソナリティ、職場事情など、さまざまな要因が絡み合い、解決への道筋は複雑になります。

本連載の第 98 回から 100 回では、佐伯胖氏の著書を手がかりとして「中動態」という概念を元に検討しました。佐伯氏の著書は、情報システム学会の中西昌武氏から紹介されたものです。中西氏から村井実氏の『『善さ』の構造』もぜひ読むよう勧められました。今月は、村井実著『『善さ』の構造』を元に検討します。

村井氏は近代社会が「快さ（便利さ・利益）」を「善さ」と取り違え、人間が本来向かうべき価値の中心である「善さ」を見失いつつあると警告しています。村井氏は、教育を始め、政治・経済など多くの分野で「考えちがい」の危機が見られるといいます。

この指摘はコロナ禍を経験した現状にも当てはまります。現実の世界で他の人との関係から切り離され、対面でのやり取りが減ったことにより「関わらなくてよい」と「快さ」を感じる人が増えたように思います。煩わしさから解放され、攻撃される、あるいは対立のリスクも減り、その場だけのことを考えれば確かに快いと感じる側面はあります。『『善さ』の構造』は、こうした現代の状況を読み解くために、企業の現場で起きている複雑なハラスメント問題に向き合うための重要な視座を与えてくれるように思います。

村井は「善さ」の基準として、「相互性」「無矛盾性」「効用性」の 3 つに「美」を加えました。この 4 つが充足されて初めて「善さ」となると記しています。また、これらの基準は、複合的に関連するといいます。

相互性：人間は常に他者との関係の中で生きており、行為はその前提に立つ

無矛盾性：言動や価値観が全体として一貫している

効用性：人間は、生存・維持・発展に対して、よりよい方向に動こうとする

前述したケースのパワーハラスメントは、単に相手の「言い方がきつい」「態度が威圧的」

「指導が厳しい」という表面的な問題ではなく、かつては信頼に支えられていた人間関係が薄れ、長期的視点での人間関係を築くプロセスが抜け落ちてしまった結果、ネガティブな心的状態が生じると考えます。

コロナ禍以降の社会では、タイパ・コスパが強調され、効率や負担の少なさといった「快さ」が重視され、強調される傾向があります。しかし、同時に、対面の場で自然に育まれていたはずの、相手の表情や声の調子から理解していた微妙なニュアンス、沈黙であっても通じる対話、場の空気を整えるといった、「美」を支えてきた要素が弱まりつつあります。

また、相互性が損なわれると、「リスクからいかに逃れ、自分を守るか」だけに意識を向けることになります。無矛盾性が揺らぐと、相手の言動の一部だけを切り取り、全体の文脈を見なくなります。効用性が低下すると、関係をより良くするための対話や調整が行われず、本来解決すべき問題は放置されたまま蓄積されていきます。こうした3つの基準と「美」が低下していくことで、本来なら対話やできごとにより解消できたはずの問題が、一転してハラスメントとして立ち上がるということではないでしょうか。

最近では、業務でもプライベートでもスマホを常に手元に置き、絶えずアップデートに追われています。ひっきりなしに届く通知や、厳密な締め切りのタスクに注意を奪われ、対面で相手の表情や声の調子、沈黙の意味、場の雰囲気といった情報を受け取る前に、意識がスマホへ引き寄せられてしまいます。

オンライン化やスマホ依存の進行により、他者と深く関わらなくてもすむ「快さ」を優先しがちになり、対面の場で自然に育まれていた情報を得る機会、そして「自ら考え抜く」という最も重要な営みが減っています。その結果、村井氏の言う「考えちがい」はさらに進み、いまや「そもそも見てもいないから、考えもしていない」という状態が生じています。

この「見なさ」は、関係における美を損ない、相互性や無矛盾性を弱め、効用性のある対話を生みにくくしていると考えられます。村井氏が「善さ」について、今を生きる私たちや未来に向けて投げかけた問いを踏まえると、人と人との関係性、一貫性、そして私たちは何を求めて生きるのかを、あらためて考える必要があります。

IS 技術者の方々がやりがいを持って働くことができるよう、そして組織がよい方向に向かうために何がよいのかについて、本稿では今後も探って参ります。皆様からのご指摘やご意見をお待ちしています。

<参考・引用>

*1) 村井実著、「善さ」の構造、村井実著作集（1988）小学館